



すべての子どもたちの ワクワクする学びに 寄り添いたい

丹波市教育委員会広報
教育たんば 3月号



*丹波市の教育に関する重点施策の詳細については左下の二次元コードからホームページにアクセスしてください。

丹波市では、令和6年度に教育に関する7つの重点施策（*）の一つとして、「子どもたちが安心して学べる居場所づくりと支援体制の充実」に取り組んでいます。

そこで今回は、学校で子どもたち一人ひとりに寄り添って学びを支えている人たちに話を聞きました。

特別支援教育支援員の西田千尋先生と多文化共生サポーターの石田スエリ先生は、「友達」のように近い存在として温かいまなざしで子どもたちを見つめていました。西田先生は、「できた!」と言って喜ぶ笑顔が子どもたち一人ひとりに生まれることを願い、毎日子どもたちに声をかけています。石田先生は、通訳や翻訳だけではなく、子どもたちの気持ちに寄り添い、支えてあげられるところでしょうかと子どもたちを支えています。

スクール・カウンセラーの近藤美菜子先生は、先生や保護者の方へ「橋」をかけるように、子どもたちとの関係性をつなぎ直し、子どもたちを支える輪を広げています。

安心できる、味方がいる、自分たちを大切にしてくれる人がいる。そして、「居ないといけない」ではなくて「居たい」と思える。

子どもたちにとって、学校がワクワクして笑顔になれる場の一つになることが私たちの願いです。

もう一回つなぎ直すというか、「橋」のようなイメージで、その子を支える人も増やしていく

仕事の内容を紹介してください。

子どもたち、保護者や先生方からの相談を受けています。子どもや保護者の方、親の場合には相談室の中でお話をします。先生方であれば、職員室の中で「こいつの子がいてね」みたいな感じでいろいろ話をします。それと「教育プログラム」という授業を子どもたちに行っています。例えば、全校集会で「心についての学習」や、ストレスケアの話、部活の総休前に緊張したときにごうたらよいのかなどについて話をしたり、小学校であればクラス単位で話をしたりすることもあります。先生方に対しても、年に2回、研修という形でテーマを決めてお話をしています。あとは、クラスに入れなくて違う部屋で勉強している子どもたちの様子を見に行ったり、教室を回って授業中の子どもたちの様子を見たりしています。

この仕事をはじめられたきっかけを教えてください。

子どもが好きだったのでもともとは幼稚園の先生になろうと思っていましたんですけど（笑）、私が高校生のときにちょうど児童虐待が話題になって、友達関係うまくいかないとか、いろんなしんどいことをもっている子たちが、私だけではなくて学校の先生とかいろんな人に支えられながら、ちょっとずつ元気になるって姿を見るとやっぱりやってよかったかなと思いますね。

この仕事の難しさにはどんなところがありますか。

学校に来ることがしんどくなったけど、私と会う時間だけは必ず来てくれるようになった子もいました。その子の置かれたしんどい状況というのはなかなか変わらなかったんですけど、おそらくその子のなかでの出来事へのとらえ方が変わって、三カ月くらいで随分元気になって、最後は「もう相談室卒業するわあ」と言っていて去っていった子もいます。そうやって、大きな変化があった子もいます。ただ、心の傷つきの度合いにもよると思うんですけど、深く傷ついた心が変わっていくのはすごく時間がかかります。それと、擦り傷とかであれば

待が社会問題として大きく取り上げられたときがあって、困っている子どもたちを支える仕事は何があるんだろうというところを自分で調べて、臨床心理士という仕事があるんだということを知って。ただ、当時はメジャーな仕事ではなかったですね。私が小さい頃は、スクールカウンセラーはいなかったです。志してからは心理学の本をたくさん読みました。資格を取るために、大学と大学院に行ったという感じですね。

当時あまりロールモデルが無いなかで、こういう仕事に就きたいって理想を「自身で描いて突き進まれていったのがすごい」ですね。

もともと心に興味があって。「あの人のなにか怒っているな」とか、「この人こんな気持ちかな」とかをすごく感じて、なんでそう思っているのかなというのを結構考える子どもだったんだと思いますね。変わった子だったんですね（笑）。

この仕事をしていてよかったと思われるときはどんなときですか。

いろんな背景を持った子に出会うんですけどね。家庭がしんどい子とか、学校でやっぱり、かさばたになって治っていくのは自分でもよくわかりますけど、その子の心の変化というのはなかなか目に見えにくかったりするので、本当に今やっていることであっているのかな、自分がやっていることって意味があるのかなって、正直悩むこともあります。中学校は3年間しかないの、出会った時点で卒業まで半年みたいな子もいます。私が出会っている中で大きな変化はなかったかもしれないけど、その子が将来的に元気になっていってくれたらと思うこともあります。

子どもたちの学びを支えるにあたって、大事にしていることは何でしょうか。

私だけがその子どもと関係が作れたら良いわけではなくて、いろんな先生たちと、ご家庭とつながるようになっていく。もう一回つなぎ直すというか、「橋」のようなイメージで、その子を支える人も増やしていければと思っています。なので、職員室でのたわいのない会話や先生たちとの関係をすごく大事にしています。



スクール・カウンセラー
近藤 美菜子先生

先生たちの話を聞いて、先生がその子を支えることができるように先生を支える。先生や保護者の方を支えることが、結局子どもたちのためにあります。私は大きな「チーム学校」の一員という気持ちでやっています。

絶対 あなたの味方やから心配せんでいいで

仕事の内容を紹介してください。

子どものために授業の通訳をしています。言語はポルトガル語です。あとは、保護者への連絡のための文書や成績表などを翻訳しています。この仕事をしていてよかったと思われるときはどんなときですか。

子どもたちからはいつも元気をもらいます。子どもたちは、「先生来てくれてありがとう」、「先生のおかげで今日できた」、「そばにいてだけでうれしい」、「悩みを聞いてもらえただけでうれしい」、「どう伝えたらいいかわからなくて困っているときに助けてくれる」とか言ってくれます。子どもたちからそういう言葉を聞いた時が一番うれしいかな。

子どもたちの学びを支えるにあたって、大事にしていることは何でしょうか。

その子どもに合わせることを支えてあげられることだと思います。一人でいる子には、「いつでも困ったら家に電話して」と言ったりとか、いっしょに勉強するとか、ぎゅゅとしたりとか、ひつついて顔を見て話を聞

その子が自分でできたとか、こんなことが知れてよかったって思えるように支えてあげたい

仕事の内容を紹介してください。

クラスのなかで子どもたちの学習のサポートをしています。子どもによって、困っている内容はそれぞれ違うので、その子が何に困っているのかに気づいて、その子自身ができるように手助けしています。教室に入って、先生と一緒に子どもたちの様子を見ながら、横について声をかけたり、いっしょにやってみたり。給食も一年生といっしょに食べます。

この仕事をしていてよかったと思われるときはどんなときですか。

できなくてイライラしたり怒ったり泣いたりする子もいるんですけど、その子たちに寄り添ってサポートすること、その子ができたときに、自分でこんなことができたという感じに、すごく笑顔になってくれたりしたときに、本当にやってよかったなと思っています。毎日のちよつとした積み重ねで一年くらい経ったら、ああこの子はこんなことができるようになったなあとか、そついつうふうに成長を感じたときは、よかったなと思います。

この仕事の難しさにはどんなところがありますか。

何かわからんけど怒ってるとか、何に困っているのかを伝えてくれないときとかは、本当にその子に寄り添って話を聞きます。それでも言ってくれなかったら、「じゃに困ってるんか」とか、



子ども多文化共生サポーター
石田 スエリ先生

くとか。絵を描くのが好きな子どもだったらいっしょに絵を描いたり、いっしょに塗ったり。でも、やっぱりそばに寄って話を聞きます。あとは信頼関係が大事ですね。お母さんには言わないけど私には話してくれることもあります。大人だからわからないってならずに「友達」として話してくれます（笑）。子どもが困っていることがあって親に話をしないといけないときに、「この子は悪くないんですって」ってあげようか」と言ったり、「ちょっと時間ちょうだい。自分で伝えたいから」とか。「もし勇気が出たら自分で言ってみよう」とか。石田さんお願いします」とか。

そついつういっしょに思える石田先生という人がいるのは、子どもたちにとって心強いですね。

「私絶対あなたの味方やから心配せんでいいで」と言っています。それを信頼してくれることが私は一番うれしいかな。石田さんやったら絶対お母さんに悪いこと言わへんから、大丈夫って（笑）。



特別支援教育支援員
西田 千尋先生

子どもたちの学びを支えるにあたって、大事にしていることは何でしょうか。

子どもたちには、学校が楽しいと思っていほしいので、その子が自分でできたとか、こんなことが知れてよかったって思えるように支えてあげたいです。笑顔で接して、子どもたちに笑顔が生まれるようにしたいなと思っています。つい怒ってしまうこともありますが（笑）。